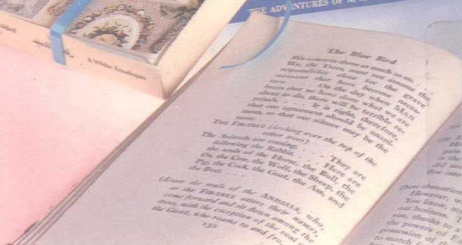
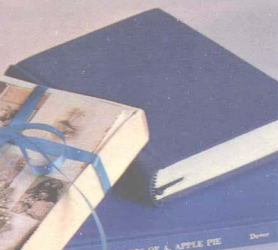


虹を織る日々

小さな愛を育て

熊井明子



糸を織る日々

小さな愛を育んで

●著者の本紹介

『風の香り愛のたより』（じゃこめてい出版）
『夢もようのタビスリー』『猫の文学散歩』
（集英社）『愛のポップリ』（講談社）『私の部屋
のポップリ 正・続・続々』（生活の絵本社）
『私の猫がいない日々』（白川書院）『指輪の
猫』『夢色の風にいる猫』（サンリオ）『熊井
明子の楽しいポップリづくり』（生活の絵本社）



JAKOMETEI

虹を織る日々

一九八一年八月十五日 第一刷

定価・九八〇円

著者・熊井明子

編集者・青木太郎

発行者・槌谷英一郎

発行所・株式会社じゃこめてい出版

東京都千代田区神田神保町二丁目四六番地

電話 東京（二六四）三七七九

振替 東京二一六七一七九

印刷・三晃印刷株式会社／ツチャ印刷株式会社

製本・協和製本株式会社

© Akiko Kumai

0095—17058—3354

目次

第一章

虹のノオト——小さな愛を育んで

青い花の中で、小さな夢が燃えていた 9

恋する時、少女も魔女のように 15

思ひ出のインクに、夢のペンを浸す時 21

指先が傷ついても、いらくさを編みたい 27

言葉を鍵にして、薔薇の花咲く世界へ 34

漂うように旅を続け、時には星の下に眠り 41

あなたの美しい年齢はいつおとずれる？ 48

やさしい言葉の中に、長い友情をとどめて 55

子守歌のようになごやかな母との対話を 62

宝石よりもすばらしい本がくれた贈物
夢と勇気を道づれに新しい世界へ 76
69

第二章

青い花のノオト——やさしさを探して

- どこかで新しいパーティが 89
生きる姿勢は強い花のように 92
人は見かけによらないことも 96
テニスの選手になれなくても 100
傘を手に雨にうたえば 104
声の大きさ気にしてますか 108
すてきな香りのような電話を 112
やさしい言葉の美しい波紋 117
雲のように自由なおしゃれを 121
送る人、送られる人 124

子どもにそそぐやさしい眼差 128

第三章

季節のノオト——いきいきと心おどらせて

お年取りと新年と 133

祝福の詩 135

熱々のクレープ 136

立春が過ぎて 137

三月、雛の月 138

花々と桜もちと 139

花の生命力を 140

あなただけの新学期 141

五月の女 142

六月はサクランボ 143

若い夏 144

露草をみつめて 145

ただ一度の出会い 146

グリーン・ノート・ポプリ 147

秋の午後一人のティール・タイム 148

一枚の木の葉 149

炎の色が恋しくて 150

暖炉にあこがれて 151

終りから新しい始まりへ 152

第四章

旅のノート——出会いに胸をときめかせて

雪国の白い夜 155

ロンドンの街角で 167

旅であった人 170

「これでいいんだ、これでいいんだ」 173

白木蓮の花のような女^{ひと} 176

倉敷の民芸仙人 178

幽霊を見た娘 180

ひとり旅のキャリア・ウーマン 183

一人静 186

哀しい愛を形にとどめて 189

夢のかけらの落穂拾い 192

第五章

日々のノオト——夢をつむいで

リネンのクロスの上に愛の夢が広がる 197

思ひ出話の中から 204

十年後の夢 212

祈りのリボンをその髪に 214

一枚のハンカチ 217

百枚の猫の葉書から 221

猫の留守番 225

一匹の野良猫から 227

ポプリの香りの中に 230

月日は流れて乙女たちは残る 234

写真はお好き？ 238

虹を見るととき 242

あとがき 246

挿画 多賀リヤ／カバー写真

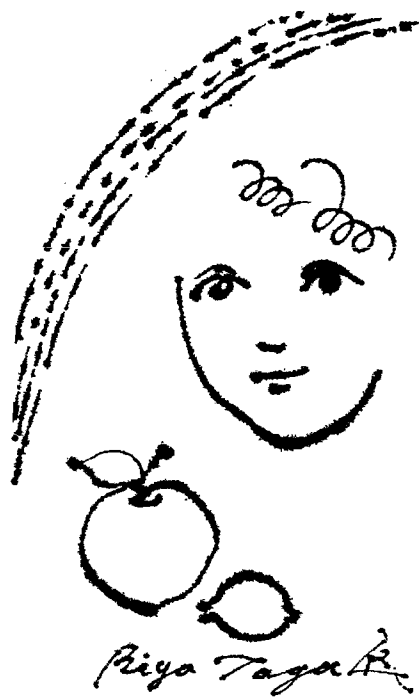
佐野篤／装幀 吉村忠

著者写真協力・阪急百貨店

第一章

虹のノオト

——小さな愛を育んで



青い花の中で、小さな夢が燃えていた

つい最近、長年の友人が一冊のノートを返してくれた。

「ごめんなさい、つい長くなって……」

本当に長かった。そのノートは十数年間も、彼女の本棚の隅に忘れられていたのだ。

なつかしい青い花もよりの布表紙。それは、私が製本講習会に二日間出て、自分で装幀したものだった。背中の丸みも布の糊づけもうまくいって、どこにも売っていない素敵なノートが出来上ったうれしさは、今も忘れられない。何に使うかさんさん考えたあげく、大好きな詩を書きぬいて、アンソロジーを作ることにした。そこで父の本棚から詩集をひっぱり出して、ボードレー、レイモン・ラディゲ、リルケ、中原中也、萩原朔太郎、北原白秋などの詩を書きうつした。

やたらに「孤独」「憂鬱」「寂し」「かなし」「涙」「暗い」といった言葉が目につく詩を読み返していると、十七歳の頃の喜びや悲しみが次々とよみがえってくる。その頃、私は自意識過剰の、劣等感で押しつぶされそうな女の子だった。夢ばかり見ていて、しかもその夢と現実のギャップの大きさに、ますますすみじめになるばかり。現実のすべてに不満を抱いていたのだ。自分

が美しくないことも、恋人がいけないことも、あきあきするような勉強を続けなくてはならないことも、下宿住いの友達のように自由にふるまえないことも、展覧会や音楽会やロードショーなどには縁遠い地方都市に住んでいることも。

暗い気持で世界を見わたすと、暗いものばかり目につく。不幸な結婚、愛の裏切り、恐ろしい人間の行為、あきもせず繰り返される戦争……悲惨な人間の歴史。そんなことばかり考えていると変に虚無的になり、生きることが、何の意味もないような絶望的な気持になってしまう。

ある日、そんな気持を父に話してみた。死んでしまいたくなることも……。父は読んでいた本から顔をあげて、

「うん。しかし、まあ、生きていてみるよ。きっとよかった、と思うから」

と言うと、また本を読み続けた。私は、何だか肩すかしをされたような気がして、ぽかんとしてしまった。いやに自信のある言い方！ 本当に「生きていてよかった」と思う瞬間が、私の未来にあるのかしら？ 一体、どんな夢が実現したら、私は心から「生きていてよかった」と思えるかしら？

その夜、一晚中星のめぐるのを眺めながら、思いきり夢をひろげてみた。と言って、私は別に異国の王子さまに求婚されたいとか、映画スターになりたいとか、月に旅行したいとか夢みたわけではない。そうした夢は小説の世界で見つけていたし、それによって私が幸福になれるとは思えなかった。

私の夢は、すべてを投げ出しても悔いない恋をして、その人と結婚し、ひとすじに愛しとおすこと。変化に富んだ家庭を作ること。私の首にむっくりした手をまわして「ママ、大好き」と言う可愛らしい子供を持つこと。庭には紫の筋のある白スミレやヒヤシンス、香りのいい沈丁花や木犀を植えたい。さらに生涯の生きがいとして、ものを書く仕事を持ちたい。外国へも行きたい。現実の自分を冷静に分析してみた結果、そうした夢はすべて、実現不可能に思われた。しかし私は、それらの夢の様子を心の奥深く播くことにした。そして青い花もようのノオトに、次の詩を書きうつしたのだった。

わかき日の夢

北原白秋

水透ける玻璃はのうつはに

果*のひとつみづけるごとく

わが夢は燃えてひそみぬ。

ひややかに、きよく、かなしく。

今つくづくと眺めると、布表紙の青い花の色は背の部分だけ陽にやけ色あせている。十数年の歳月が花の色を変えたのだ。そして私の身の上にも、思いがけないことが次々と起った。苦しみや悲しみも知った。

それはさておき、一足とびに現在の私に目をうつしてみると、驚いたことに、十七歳の頃の夢は、ほとんどかなえられるか、あるいはかなえられつつある。様々な偶然が重なって自然にそうになっている。それに私は、確かに何度となく「生きていてよかった」と思ったのだ。途中でくじけて投げすててしまわないで、じっと抱き続けた夢は、やがて現実となるものらしい。

私のまわりを見ても、そういう人は多い。たとえば私の主人は若き日、すぐれたフランス映画を見て映画監督になりたいと夢みた。専攻は社会学だし、松本に住んでいて映画界とはあまり縁がなかったが、結局映画監督になり、創りたい映画だけを創っている。私の友達はコスモポリタンのな人生を送るのが夢だと言っていたが、今スイス人と結婚して、一年の半分は旅をしている。今年是一年がかりで世界中を船めぐりながら、スイスへ行き、一応そこに住みつくつもりとか。「不治の病を一つでもなくしたい」と語っていた人はアメリカの大学で血液の研究をしているし、「一生彫刻にうちこむのが夢」と言っていた人は次々と斬新な作品を発表している。

皆ごくふつうの人たちだが、現実家の家族や友人から「そんな夢みたいなこと言って」とか「食べていかれないぞ」と嘲笑されても、夢をすてなかつたのだ。ヴェニス・ブラッドワスも『幸福の心理学』（柳生直行訳・大和書房）で次のように言っている。

「心のなかのイメージを持つことによって、わたしたちは自分の欲求するどんな状況もうちたてることができる——夢は実現する」

実現するためには努力も勿論大切だけれどそのことについては別の時に語りたい。とにかく、

まず夢をえがくこと、それを信じて抱き続けることである。若いうちに自らを限定してしまわないで、のびやかに夢をえがき、自分の人生の舵をとっていったほしい。

夜ふけにひとり、青い薔薇の花もようのカップでミルクティーをのむ時など、私はまた新しい夢をえがく。私はよく台所のテーブルで仕事をするが、目の前の壁に数々の美しい写真をはり小さな白い棚に大切なものを並べてあるので、流しやガス台に背を向けて坐れば、そこはたちまち私だけのイメージ空間となる。

白い棚に並んでいるのは、ガラスびんに入れたポプリ、小さく切りそろえたガラス、アンモナイトの化石、ミニチュアの木靴、指先ほどのセトモノのワニの仔、猫の形のヒビが入っている紫水晶の指輪、松ぼっくりやチューリップの型の香水びんなどである。それらの小物がもたらす夢と私自身の体験をおり混せて、私はメルヘンを書く。

写真の方は、ヒマラヤの青いけしの花や、名も知らぬ砂漠の淡紅色の夕やけ風景、妖精の手鏡のようなスイスの湖、“Love is now, and so are we”と書かれたポストカードなど。

それらの中からほえみかけているのはシンガー・ソングライターのキャロル・キングである。無難作に髪をたらし、セーターにジーパンという恰好の彼女の、何とも言えない暖かみのある微笑。眼が合うと、彼女の歌のどれかが私の心の中でひびき始める。

友達に会いたい時は「友」、パンを焼いたりジャムを煮たりしたい気分時は「ラズベリージ

「サム」、少し悲しい時は「喜びは悲しみのあとに」、うれしい時は「ナチュラルウーマン」。

キャロルの「つづれ織り」から「サラブレッド」まで八枚のレコードを聞いているうちに、いくつかの歌は私の心の中にレコーディングされてしまったらしい。彼女の暖かく力強い声が、ふと鼻にかかった感じになり、ほろっと宙に消えて行く時の心残り……。彼女の歌を聞いていると、一緒にハミングしたくなったり涙ぐんだりする。やさしさが、じかに伝わってくるのだ。

特に第五集「ファンタジー」は、曲がポップなソウル・ミュージックの影響を受けているとかで、不思議な魅力にみちている。作詩もまた素晴らしい。かつて「夢を追うのはやめて」と歌った彼女だが、「ファンタジー」ではかすかな希望を夢において、愛を、幸福を、平和への祈りを歌う。最後に収められた歌は、特に今の私にぴったりである。彼女はまるで語りかけるように、静かに歌う。

ファンタジーの世界では

あなたは誰にでもなれます

いつまでも夢を抱き続けていれば

いつか私たちの現実も理想の世界へ

近づいてゆくかもしれません

——キャロル・キング（松宮英子訳）